



妻西中キャラ めにしちゃん

学び磨き鍛える

正しい判断力とたくましい実践力を
もった妻沼西中生を育む学校

発行 熊谷市立妻沼西中学校
電話 048(588)1361
FAX 048(589)0496
令和7年10月20日
第18号

『戦後80年 東武熊谷線の妻沼駅』

校長 清水 利浩



「妻沼駅」のことをお話しします。かつて「東武熊谷線」にあった駅です。東武熊谷線は、群馬県にあった中島飛行機工場で働く工員や資材を輸送する必要性から、戦争中、軍の命令で建設されました。工事は2期に分けて始まりました。第1期は、熊谷―妻沼間⁽¹⁾。軍の命令で急ピッチに進められ、熊谷駅を出て、右に曲がってからは、ほぼ一直線に線路が引かれました。戦争中で物資が少ないため、線路などは、東武日光線として複線で開業していた線路の片側を撤去して、熊谷線に持ってきたよ

うです。高崎線沿線などに住む工員たちは、列車で熊谷駅から妻沼駅まで来た後、バスに乗り換え、刀水橋で利根川を渡し、工場へ通勤しました⁽²⁾。当時は、蒸気機関車が、多い時は五両もの客車を引いて妻沼駅へやってきました。妻沼駅前では、太田工場と小泉工場行きに分かれて、バス7、8台が待ち、工員たちは長い列をつくってバスに乗り込んでいきました。工員の通勤の足を確保するため、飛行機生産のピーク時には、三交代の工員を送迎するために、昼夜、ピストン運行されました。妻沼駅は、乗り換えの駅として大変にぎわっていたようです。駅前には、売店。その奥に東武バスの大きな車庫があり、運送会社（丸通）があり、トラックが群馬まで資材を運んでいました。第2期工事は、妻沼から利根川を渡し、西小泉駅に接続する計画でした。しかし、完成前に終戦となります。その後、熊谷線は利根川を渡ることなく、1983（昭和58）年5月31日、廃止となりました。妻沼駅の東側（今のカスミあたり）には、利根川鉄橋工事の資材がたくさん置かれ、近くの子どもたちは、その資材の山で登ったり降ったりして遊んでいたそうです。この資材は、のちに赤城山東側の地上ケーブルに利用されたといえます。地上ケーブルは、赤城山大沼の東側から小沼、桐生方面に伸びていました。その後、廃止となり今はありません。妻沼中央公民館にあるクリーム色の車両は、今、かつて賑わいをみせた妻沼駅と完成しなかった利根川を渡る第2期工事区間の方角を向いています。

- (1) 工事の許可がおりたのは、1942年6月。そして翌年11月に工事を開始し、1944年12月には完成。わずか1年足らずで完成させたスピード工事でした。
- (2) 中島飛行機工場では、約8000機もの軍用機の生産を行っていました。1944（昭和19）年、この中島飛行機工場で働いていた人は、太田工場で67000人、小泉工場で88000人だったといわれています。
- 作成にあたり、青木久夫先生に、当時のお話や参考となる資料をいろいろと紹介していただきました。ありがとうございます。

＜参考文献＞ 「なつかしの妻沼線40年の歩み―写真にみる東武熊谷線」平成4年3月 熊谷市立図書館